

夏は名のみなのしのぎやすさよ

久しぶりに旅に出るけど、今回も前回に引き続き、下松の楠君のところへお邪魔する。行程は8月28、29日（平成11年）の1泊2日だ。どうも近頃、旅といえば近場で済ませることが多くなっている。でも、近くても遠くても旅は旅だ。面白さは距離の長短で決まるものではない。どこへ行ってもいいものはいい。

今回は1ヶ月くらい前から予告してあったので、楠君のほうも、「行くところはなんぼでも用意しとるし、休みももらえるようにする」と、嬉しいことを言ってくれる。

さて、どういうルートで下松まで行こうかと考える。前回同様快速「ムーンライト九州」を足に使うか、新幹線にするか、昼間の在来線に乗るか、はたまた松山周りで柳井行きフェリーで行くか、案は尽きない。この構想を練る段階が楽しい。

いろいろ考えた結果、28日の朝一番の快速「マリンライナー2号」で出発して、鈍行を乗り継いで、9時半頃に岩国で落ち合うこととなった。楠君は車で下松から出て来てくれる。少しでも会える時間を長くするための苦肉の策でもあった。

というのは、頼みにしていた夜行快速の「ムーンライト九州」が1週間前の22日で運^{あさ}転が終了になっているのだ。この列車さえ運転してくれていたなら、最初の停車駅の厚狭で降りて、折り返しの上り一番列車に乗ると、下松には7時半頃に着くことができたのだけど、これでは乗りたくても乗ることができない。このことが判明したのは、時刻表を買ってきた出発の2、3日前のことだった。

また、フェリー案で私が考えていたのは夜の特急で松山まで行っての夜行便利用だから、柳井に着くのは未明の4時くらいである。これではいくら何でも早すぎる。朝まで乗ってられるのならいいが、そういうことは時刻表には書かれていないので、すぐに松山方面へ引き返すのだろう。でも、昼間に船を利用しては時間のロスになって、滞在時間が短くなる。これが3日くらいの行程だったら、フェリー利用も一興と思ったけど、案としては早々と消えてしまった。

例によって、切符を買ったのは前日の仕事をしながらのことで、「ムーンライト」の運転の有無もそのときに改めて確認に行った。しかし、当然のことながら「ムーンライト」は運転されていなかった。

旅客列車の運行は時刻表に掲載されている列車だけとは限らない。ごくまれに非掲載の臨時列車が運転されるケースがある。

私の経験では、国鉄からJRに変わるときに出かけた旅で、東京発大垣行き夜行列車を利用したのだが、定期列車だけではとても乗客を捌き切れないということで急遽、後続の臨時便が出たことがあるし、北海道では雪のために飛行機が飛ばなくなり、当時の急行「まりも」にやはり後続の列車が出るなど、いずれも時刻表に掲載されていない列車である。前者は多客期の臨時増発で、後者はアクシデントによるものだが、臨機応変に対応すると時刻表の締め切りに間に合わず、掲載されていない列車が走ることになる。

夏休み中でもあることだし、「1週間延長」という措置をわずかに期待して高松駅の「みどりの窓口」に並んだ。

「今晚の『ムーンライト九州』の指定席はありますか」

「少々、お待ちください」

とマルスに向かう。しばらく時刻表とマルスを見比べながら、
「誠にすみませんが、本日は運転されておられません」

やはりそうか、と思いながら駅を後にした。分かっているがらの確認だったから、あっさりしている。

時刻表に載っていないと分かった時点で連絡もし、行程も伝えてあったけど、仕事を終えて家に戻ると、改めて楠君にこのことを話すと、

「仕方ないな。まあ、それはそれでまた別の展開ができてええが」

「で、こっちは予定通り、『マリン2号』で出て9時半には岩国に着くけん、頼むわ」

「9時半岩国か。早よ出ないかんの」

「最初に7時半下松言いよったんとそう変わらんだろう」

いよいよ出発だけど、「マリンライナー2号」は4時38分の発車だから、3時半には起きなければならない。朝はまるっきり弱い私にはぞっとするような時間帯だ。でも結局妻と話をしたり、テレビを見たりして、床に就いたのは23時半頃であった。

時計を見て、私は目を疑った。時計の針は4時40分を指している。列車はちょうど高松駅を出て、香東川辺りを心地よく快走している頃だろう。そんなことを考えている場合ではない。我に帰ると、妻を起こす。

「おい、起きてくれ。時間が過ぎとる」

まだ夢の中といった風の妻に起きてもらって身支度をしている間に、私は時刻表と格闘する。

「大丈夫？行けそう？」

と、心配そうにも見えるけど、少しからかい気味な口調で、思案顔の私を凝視する。それでも、何とか時間は帳尻を合わせることができ、5時過ぎに家を出た。東の空はもう薄明るくなっており、赤と青が入り乱れていた。これが「暁」なのかなと、少しだけ気分がよくなった。

車で通い慣れた道を走る。でも、早朝はまったく違った表情を見せる。天気はあまりよくないようで、東に見える「暁」以外は北も南も西も雲が重たくのしかかっている。左手には天下の名園栗林公園を擁する紫雲山が見えるはずなのに麓しか見えない。この山は200メートルにも満たない大変低い山で、それが見えないということは相当雲が低いということだ。この調子では今日のドライブはあまり期待できそうにない。もともと、高松と下松が同じ瀬戸内海沿岸の都市だといっても、天候までまったく同じということはない。こればかりは行ってみないと分からない。そうやって心の中で自分に言い聞かせてみてもこの空を見てみると、予定の列車に乗り遅れたことも手伝って、一旦よくなった気分も再び減入ってしまう。

そんなことを考えているうちに高松駅に着いた。時間は5時半だ。そろそろ夜明けといった感じの8月の高松駅はほのかに浜風が吹いていて気持ちがいい。

改札を通りホームへ向かうと、かなり前の車両のほうまで歩かされた。夏休み最後の週末とあって家族連れや中高生がたくさん乗っているのだ。

5時38分、今回の旅はちょうど1時間遅れでスタートすることとなった。

このあとの行程は一部を変更して、最後は9時32分、予定通り岩国に到着するようになっている。この1時間のロスを埋めるような芸当ができるのは新幹線しかない。まず、この列車で6時37分に岡山に着くと、すぐ接続する6時46分発の山陽本線三原行きに乗り、福山で「こだま601号」博多行きに乗り換えて広島まで行く。ここで当初の列車であ

る8時44分発の岩国行きに乗って、岩国で何喰わぬ顔をして再会する。しかし、この私が「何喰わぬ顔」をして楠君と会えるかどうかは疑わしい。

発車すると、だいぶ明るくなった高松の街中を走る。出番を待つ電車やディーゼルカーがたくさん停まっている高松運転所を横に見ながら、香東川を渡ってさらにスピードを増していく。

いつもは車で走っている旧国道11号の県道33号と併走して坂出まで一気に駆け抜けると、もう辺りはすっかり明るくなっていて、一日の営みがスタートしようとしている。ここでどっと乗り込むけど、逆に降りる乗客はほとんどいない。6時前の坂出に降りるのは仕事や学校へ早めに行く人くらいのものであろう。

それまでどんよりしていた空は東だけではあるけど、さっきの「暁」からさらに明るくなり、照らされた瀬戸内海も輝いて、右の車窓がやけに眩しくなってきた。

6時11分に児島に到着する。部活の早朝練習の高校生や出勤のサラリーマンが多く乗ってくる。高松や坂出から乗っている人と合わせると、乗車率は8割くらいに達している。このあと、茶屋町、妹尾と停まって6時37分、岡山に着いた。

次に乗るのは、山陽本線の6時46分発の三原行きである。これに乗って、福山まで行く。

この区間の普通列車に乗るのは、ちょうど半年振りになる。前回3月に下松へ行ったときに、帰り道で使って以来だ。わずか半年だけど、沿線風景をそうそう覚えているわけでもないの、いつ乗っても楽しみである。

定刻どおり出発。車両はかつて京阪神の新快速として活躍した117系電車である。今では、新快速からは撤退して、岡山ー福山間の快速「サンライナー」用の車両としてお馴染みだし、他にも東海地区や福知山線でも走っている。でも、阪神や阪急に対抗して登場した新快速用の117系が、まさか岡山近郊を走るようになるとは、私もそうだが117系自身も思ってもみなかったことだろう。

庭瀬、中庄と停まって7時01分、倉敷停車。土曜日ということもあってか、さすがにこの時間の下り列車では降りる人はあっても乗ってくる人はごくわずかだ。周りの道も田んぼも露で濡れていてしっとりしている。何だか車内の雰囲気と同じようだ。

新幹線に接続している新倉敷でもあまり乗降は見られず、列車は淡々と走る。鴨方辺りで「へんこつそば」という看板を見る。この辺では気になる看板で、気になるからこれを見ないと鴨方を通った気がしない。気になるから、一度食べてみたいとも思う。

徐々に乗客も増えてきて笠岡を出ると、広島県に入って7時43分、福山着。福山というと、まず印象が強いのは、駅前の太い通りである。いつも新幹線の窓から眺めているけど、我が高松駅前から通じている「中央通り」よりも広く感じるほどだ。県庁所在地高松の目抜き通りと同じくらいの広い幅の道を持つ福山はやはり広島県第2の都市だけのことはある。

もうひとつ、福山城址がある。福山は高架なので、駅の裏手にあるこの遺構を間近で見渡すことができる。福山城は旅行者に福山を訪れたことを教えてくれる大きな存在だ。また、私にとって福山城にはこれとは別の思い出がある。

それは大学4年のときのことで、学生生活最後の夏に各地の大学へ通っている中学・高校時代の友達の下宿へお邪魔しようという旅を試みた。順調に回って、最後に目黒君のいる東京から楠君の下宿のある徳山へのんびり在来線に揺られて西下した。その途中、台風に遭遇して、福山で足止めを食らってしまった。宿はすべて友達の下宿という中での旅であり、しかも、後半戦だったためにホテルに泊まることのできるほどの持ち合わせは既に

なく、仕方がないので、雨をしのげる場所を捜して横になった。それが駅裏の福山城のお濠の近くだった。一方の目黒君は私の旅とは関係なく帰省するというので、岡山まで私に付き合う形だった。だから、当然岡山で降りていて、あとで聞いたところでは、順調に帰って直後に瀬戸大橋が不通になったらしい。そういうわけで、台風の通過する福山を一人不安な面持ちで過ごした。翌朝には雨は落ち着いていたけど、その夜はまんじりともしなかった。

そんな福山駅の新幹線ホームに立って、駅前通りと福山城を眺めながら待っていると、ほどなく岡山方面から「こだま 601 号」博多行きが入ってきた。わずか6両の短い編成だ。7時54分発。

在来線から新幹線に乗り換えると、そのスピードの違いにはいつもながら驚かされる。天気がにわかによくなってきたのも、新幹線が速いからで、在来線ではこうもはっきりとは分からないだろう。肝心の沿線風景も概ね山間部ばかりなので、退屈するかと思っていたけど、久しぶりの新幹線ということもあってか、右に左に目をやっ、案外飽きなかった。三原、新尾道、東広島各駅に停まって8時38分、広島に着いた。

わずか6分で次の列車に乗る。山陽本線の岩国行き普通列車だ。新幹線から在来線だから、6分はなかなか厳しい時間だけど、ここで本来のルートと行程に戻る。1時間の朝寝坊が思わぬ出費を招いてしまったけど、自業自得である。でも、いつ廃車の憂き目に遭うか分からない新幹線の0系電車に乗ることができたのは、怪我の功名ということで、これもまたよしとする。

広島を8時44分の定時に発車すると、さっそく京橋川を渡り、続いて太田川もまたぐ。この太田川、広島市の祇園辺りから放射状に分かれて、最終的には瀬戸内海に6つの川えんこうになって注いでいる。すなわち、太田川、京橋川、天満川、元安川、猿猴川、そして太田川放水路である。なぜか最後の太田川放水路だけは、事務的な行政的な名前だ。他の川みたいに誰か付けてやらなかったのだろうか。何だかかわいそうだ。

このうち、山陽本線が渡るのは、京橋川、太田川、放水路の3本だ。それにしても、こんなに海が迫っているところで、急に毛細血管のように細くなるので、私のような旅行者にはどれが太田川なのか分からなくなる。

横川を出てからしばらくは放水路に沿う。その放水路と分かれて西広島を過ぎると今度は国道2号と広島電鉄と並んで走る。国道2号を見て気になったのは、沿線に「テナント募集」の看板を掲げた、広い駐車場を持つ大型の空き店舗が多いことである。パチンコ店らしきもの、車の展示場だったような店構えのものなど、面積が広いだけに寒々としていて、無用の長物と化した建物はもはや廃墟である。こういう建物は他に転用できないから、なかなか次の買い手が付かず、扱いに困るだろう。広島でもこの有り様かと思うと、気が重くなる。

宮内串戸辺りから瀬戸内海が見えてきて、遠くに宮島が現れる。ここからしばらく海に沿って走る。年に数回は見る風景ではあるけど、しょっちゅう乗っているわけではないので、どこに何があるかなどというのまでは分からない。同じ道でも通る度にいろいろな発見があるから、何回乗っても楽しい。

宮島を左に見ながら列車が快走を続けている間に、天気はすっかりよくなっていて、今日の行程が楽しみになってきた。朝方、曇り空を見てしょげていたのが嘘のようだ。大竹を過ぎるともう岩国だ。9時32分着。

島式のホームに降り立って、駅本屋へ通ずる跨線橋を上っていくと、楠君が立っている。入場券で入ってきているようだ。

「おお、ここまで出て来たんか」

「久しぶりやけんの。さあ、はよ行くで」

私がこうやって楠君に会いに行くと、いつも元気に出迎えてくれる。駅前に停めてある例の軽自動車に招じ入れられる。

「どう行くか」

「ところで、どういう行程にしとんや？」

「まず、『空海』でうどん食うけん、徳山や。新メニューができたんや」

今回も空海にお世話になる。これなら徳山で落ち合ってもよかったかなと思いつつ、「ほう、ええよ。それから？」

「決めてない」

楠君らしい。でも、やはり日本海方面へ出るだろうし、私も行きたい。このところ日本海を見るのは、山口に来たときだけになっている。

「どのルートで徳山行こうか？」

「岩徳線で行こう。俺しばらく乗ってないし」

岩徳線に乗ったのは、もう4年くらい前になるだろうか。だから、せめて車で沿線を行きたい。「岩徳線で行こう」というのは、そういう意味である。何も車を置いてまで乗ろうというのではない。

「じゃあ、きんめいじ欽明路道路に出よう」

と言う。

徳山へ抜けるバイパスのことらしい。事実、錦川に添う形で北へ迂回するルートを取っている国道2号への短絡線として、かつては有料道路だった道だ。まるで天皇の名前のようだ。ずっと先に欽明路峠があり、欽明寺というお寺もある。岩徳線には欽明路駅と欽明路トンネル、新幹線には新欽明路トンネルまである。

まず、県道15号で岩国の市街地を走って、ほんのちょっとだけ国道2号に入ったかと思ふと二股道があり、これを左へ入る。ここから再度国道2号に合流する玖珂町までが県道15号であり、別名欽明路道路である。分岐してすぐにある岩徳線の西岩国駅へ立ち寄る。



この駅はかつての岩国駅で、昭和4年に建てられた石造りの重厚な駅舎だ。駅前には小さいながらもロータリーがあり、タクシーが数台停まっている。駅舎の中もこの時代に造られた駅らしく、ヨーロッパ調の雰囲気が漂っている。しばらく待っていたけど、列車は来なかった。

再び車に乗って、一路西へ向かう。西岩国を出て間もなく錦川鉄道と交差するさすがは元有料道路だけあって走りやすい。でも、車の数は多いのに何だか寂しい。

途中、ドライブインか大衆食堂といった感じの広い駐車場を持つ店に車を停める。すると、楠君は私に運転席に座れと促す。

「おい、何でや？」

「だって、齊さんよう道知つとるやん」

「で、君はまた寝るんやろ？」

「何で分かるん？」

結局、私が運転することになった。

「しかし、この店、なんか見覚えがある」

「ほら、またそうやって、『俺は知っとんじゃ』みたいなことを言う」

「だって、知っとるもんはしゃあないが」

たしかに知らない道ではない。以前、新岩国から新幹線に乗ったことがあるけど、そのときに通った道かもしれない。

岩徳線と併走したり、交差したり、時には新幹線を頭上に見ながら、11時頃に下松の楠邸に入る。ここで私は荷物を置いて身軽になり、代わりに楠君は夜の宴会用に買う刺身やビールを入れるクーラーボックスを積んで出発する。

さて、「空海」へ向かう。時間的にはちょうどいい11時半だ。店内は少し早めの昼ごはんを摂っている人で結構混んでいる。

「お久しぶりです」

「お、久しぶりやね。『ぶっかけ』始めたから食べて行ってよ」

「へえ、『ぶっかけ』かあ。じゃあ、それ頂きます」

「ぶっかけ」とは「ぶっかけうどん」のことで、井に入った温かいうどん、または冷たいうどんにざるうどんなどで浸けて食べるつゆをそのまま「ぶっかけ」て出されるか、かけるつゆが別の容器に入れられて自分で「ぶっかけ」るものをいう。さぬきうどんでは他にも醤油をそのままかける「しょうゆうどん」もある。こういう食べ方はたいへん珍しく、多分讃岐だけで見られるものと思われる。でも、これらを味わってみると、病み付きになる美味しさだ。私など外回りで寄るお昼のうどん屋では、このどちらかしか頼まない。

出された「ぶっかけ」は既につゆがかけられていて、うどんの上にはレモンと天カスが乗っている。食べてみると、麺は相変わらず腰のあるしっかりしたもので満足したけど、かかっているつゆについては、少し甘い。もう少し辛めのほうが私には合っているのだがここは山口県である。土地にあつた味を出しているのだろう。そういえば以前、楠君がここの辺りは肉うどんが主流で、出汁もその分甘いのだということを書いていたのを思い出した。

12時頃に店を出て、新南陽の貨物駅近くにあるお酒のディスカウントストアで早くも今晚飲むビールを買う。あとは酒のつまみだけだ。これから日本海へ出ることにする。

走り慣れたという、その程度で、と地元の人に笑われそうだけど、そんな国道2号から県道3号へ入り、山道を通る。山道といっても走りやすい道で、さすがは一桁台の県道だと感心する。この道を通して一気に鹿野まで抜ける。中国自動車道のインターチェンジのあるところで、楠君と車で走るとたいがい通る町だ。

この辺で国道315号に入ったあと、再び県道3号に入ろうと思ったら、走りやすい国道から枝分かれした目立たない道だったので、始めは通り過ぎてしまった。新南陽から走ってきた同じ道とは思えないほどに貧弱になった県道3号に入らなくてはならない理由は何もないけど、国道より県道のほうがローカル色があって面白いだろう、ということでUターンして、県道3号に戻ったのである。

さすがに1桁の県道といえども山の中に入ると、他の山間の道と大差はない。でも、こういう道のほうが変化に富んでいて楽しい。しばらくすると、かなり高いところまで上って、道もクネクネしだした。その山道の頂上の小峰峠というところで、島根県に入る。楠君が、

「あー、快適や」

「そりゃ、そうじゃ」

「シート倒して…」

「また寝るんか？」

「うん、ええやん」

「ちゃんと起きとけよ」

「斉さんは俺が言わんでも道よう知っとるけん、俺が寝よっても大丈夫やろ」

「そういう問題ではない。わざわざ山口まで会いに来て、君が横で寝よんでは何しに来たんか分からんわ」

楠君はいつも私に運転を任せて、自分は寝ようとする。もつとも、これからさらに山道に入っていくので、基本的には一本道だ。不案内な私でも走ることはできそう。それに標識にある地名で見当を付けて走るの、突拍子もないところへ行ったりはしない。我ながら、感心するところだけど、楠君もそれを知っているから私に運転させても問題ないと思っているのだろう。

でも、いつもはさっき通った国道 315 号をさらにまっすぐ走って、徳佐で国道 9 号に合流して、津和野方面から日本海へと抜けているので、今回のような初めての山道はやはり不安だ。それをよそに相棒は悠々と助手席に身を沈めて寝息を立てている。

県境から約 20 キロ走って柿木村の中心に入る。県境の時点で柿木村だったけど、山間の村ともなると範囲が広い。20 キロも走ってまだ同じ自治体というのは、人の多い都市部はもちろん、北海道にもいくらでもあるし、驚くには値しないのだけど、信号が全くといっていいほどない上に、長く続く単調な道が柿木村を広く感じさせているのだろう。そういえば、数年前の「急行三昧」で楠君と走った島根県の石見町もいくら走っても、石見町から出なかったし、私の住む香川県と隣接する徳島県では、県境で鳴門市に入ると、やはり 20 キロ走ってやっと市の中心部といった具合である。でも、こんな山道をそうとは知らずに走っていると、同じところをグルグル回っているのではないかとの不安がよぎったりする。

国道 187 号と合流した辺りに「道の駅」がある。私はドライブしているとき、折りを見ては「道の駅」を利用する。ちょっと休憩にもなるし、お腹が空けば何か食べることもできる。ここで一軒立ち寄ったことで、私たちの間に何となく「道の駅」巡りをしようという空気になった。巡るといっても、無理をして軒数を回るということではなく、これからどこを走るかわからないけど、そのルート上にあれば寄ってみようというものだ。時間があれば途中下車してみようというのと同じだ。

15 分くらい滞在して出発。運転は依然として私だ。走っているうちに日本海へ出るだろうということは、太陽を背に走っているから分かる。といっても、確信があるわけではなく、ほとんど勘である。

にちはら

さて、今度は国道 187 号を走る。ほどなく隣の日原町に入る。ここには山口線の駅がある。今朝方最初に見物した西岩国駅から分岐する第三セクター錦川鉄道が旧国鉄時代に錦町まで敷設させていて、さらに延びてこの日原へ達するはずであった。でも、当時の国鉄の大赤字の前に建設がストップしてしまい、日原まで開業させることができなかった。錦川鉄道の国鉄時代の線名は岩日線という。岩国と日原とを結ぶ線として計画されていたから、このような名前が付けられた。そんな要衝の地だから、この辺ではちょっと大きな町だ。ここで国道 9 号と合流する。

日原町の繁華街らしいところを走り、それを抜けるとまた鄙びてくる。すると、山口線の鉄橋が国道 9 号をまたぐ。そこへうまい具合にキハ 40 系だったと思うけど、目の前を通る。その交わった辺りから右にカーブして少し行くと、ここにも「道の駅」がある。ま

だ整備ができていないらしく、周辺は更地が多い。駐車場も一部はアスファルト舗装ができていない箇所がある。オープンを先行させたのだろう。聞いているラジオ番組の内容からすると、14時過ぎだったように思う。

この日原の「道の駅」には絹製品がいくつか並んでいた。日原町の特産品のような。このうちハンカチを買って帰る。他にも川魚の煮付けや海苔などが売られていた。ここも15分くらいで出る。この時間から日本海へ出るとなると、下松に戻る頃には、もう夜になっているだろう。だからといって、急ぐこともない。早く帰ろうとするあまり、沿線のぜひ見ておかないといけないものまで素通りしてしまっただけはもったいない。

日原はJR山口線の起点小郡からいうと、大体4分3くらいの距離に相当する。ここからは右手に高野川と山口線を見ながら走る。

国道9号は京都から福知山を経て、鳥取で日本海に出、益田まで海沿いを走って、益田から小郡に至る幹線の国道だ。日原から益田方面へ向けて走っている私たちは上り線に乗っているわけだけど、道路標識にはずっと先にある起点の京都も書かれてあって、その距離は500キロ以上に及ぶ。これを見た楠君が、

「いっそ、このまま京都まで行ってみるか」

「面白そうやの」

「今から行っても走り通したら朝には戻って来られるやろ」

「行く気もないのに、適当に言いよるやろ」

「何でそんなこと言うん？」

「そういうんが多いがな」

そんな会話をしながらのんびり走っていると、15時くらいだったか益田に出る。益田は山陰本線と山口線が交わる場所だ。でも、そんな益田も最近では出雲市以西の優等列車の減少などで、浜田や長門市などとともに、もうひとつ精彩がない。

特に山陰本線がひどい。山口線は鳥取や米子から小郡へ特急「おき」が3往復あるのに、山陰本線となると、優等列車は特急「いそかぜ」だけだ。5年ほど前までは急行「さんべ」が走っており、そのもう少し前になると、急行「ながと」も走っていて、朝、昼、夕と時間を分担して走っていた。さらに前には「さんべ」には夜行を含めた僚友が他に2往復あったし、急行「だいせん」、「あきよし」や山口線の急行「石見」など懐かしい名前が並んでいた。

そういう中でも王者として君臨していたのが、今は米子ー小倉間特急「いそかぜ」の前身である特急「まつかぜ」だろう。「まつかぜ」は京都から大阪を経て、福知山線を通って山陰本線に入り、博多まで走っていた特急だ。昭和36年に松江行きとして登場して、39年には博多まで延長となり、グリーン車と食堂車を備えた一級の特急で、スケールの大きさも相まって山陰本線でひとときわ輝いていた。そのあと、「まつかぜ」を補完する目的で登場した鳥取行き「まつかぜ」や浜田行き「おき」（当時）もあったけど、博多「まつかぜ」に及ぶものではなかった。今は当時の「まつかぜ」の西半分を走る「いそかぜ」にかろうじて往時のダイヤを偲ぶことができるにとどまっている。そのくらい山陰本線は寂しくなった。快速列車も浜田以



東からの運転で、出雲市を境に、もっといえば益田を境にあまりに差がありすぎるように思う。

そんな栄枯盛衰の境のような益田は今回は通過するだけだ。もちろん、京都方面へは行かず、国道9号から分かれて国道191号に入って西へ向かう。この国道は日本海に沿って下関へと向かう。その分岐の交差点で何度も信号待ちをした。

さすがに駅周辺はいろいろな店が建ち並んで、賑わっているようだ。このちょっとした渋滞は沿道の店を利用する人が多いからだろう。こうなると、先細りしていく山陰本線がますますかわいそうになってくる。今度京都からでも下関からでもどちらからでもいいから山陰本線の全線を鈍行で乗ってみようと思う。

分岐の交差点を抜けて、国道191号に入る。左手に山陰本線が併走している。ときどき現れる駅が何とも情緒があっていい。ひっそりと佇んでいて、風景に溶け込んでいる。列車が停まっていなくても、列車待ちの人がいてもいなくても絵になる駅が多い。日もだいぶ傾いているから、いっそう趣きがある。

右手には日本海、左手には山陰本線が伸びている。今日は天気がよく、風もないから波も穏やかだ。朝の瀬戸内とは全く違う表情を見せている。ところどころに展望所があってそれぞれに車が数台停まっていて、休憩がてら日本海を眺めている。私たちもその中のひとつである三里ヶ浜の展望所に車を停めた。遊歩道というほどには整備されてはいないけど、岩場ながら歩けそうなので、ちょっと下りてみる。間近で見ると、波は意外と大きく、岩にぶつかって砕けている。東映の映画のオープニングほど激しいものではないけど、それでもこれだけ近くで見ると迫力がある。



ここで、2人で撮影に興ずる。久しぶりに私もカメラを持って来ている。この波しぶきをいかにして撮るか考える。そして、ただ、撮るだけではなく、一番高く跳ね上がる場所をカメラに収めたい。しかし、タイミングがなかなか合わない。そう簡単に合うはずがないのは分かっているけど、それでも合わせてやろうと躍起になる。ピタッと決まれば、見映えのする格好のいい写真ができるのだろうと、勝手に都合のいいことを想像しながらファインダーを覗く。しかし、敵もさる

もので、こちらの思うように波は起きてくれないし、いいな思ったときには、気を抜いていて楠君と話をしていたりする。結局、納得のいくものは1枚も撮れなかった。たかが15分や20分程度いただけでまともなものを撮ろうと思うこと自体が間違いだ。そういうことは自分自身が長年写真を趣味としてやってきて分かっているのに、つい甘いことを考えてしまう。連写のできるモータードライブを持っていない悲しさではあるけど、そういう問題でもない。

再び車を発進させて、さらに西へと向かう。10キロほど走ったところにある人形トンネルをくぐると海から離れ、次の仏坂トンネルで山口県に入った。

すると間もなく、併走している山陰本線の上りの列車信号が青になっている。

「お、何か来るみたいやで」

「あ、181系や」

181系とは特急型のディーゼルカーのことである。この区間を走っている特急は、もち

ろん先述の「いそかぜ」だけである。

「それは撮らないかん」

「停めるぞ」

車を停めて撮影することにする。小倉行き
の「いそかぜ」だ。わずか3両のミニ編
成だけど、国鉄時代のままの塗装なのが嬉
しい。車の旅は時計をあまり見ないので、
一体どこを何時頃いたのかが分かりにくい。
でも、こうやって列車が通ってくると、
ありがたい。大体でも時間が分かる。もう
16時になっていて、田んぼの向こうを
走っている「いそかぜ」は西日を一身に浴
びて黄色く染まっていた。



「夏は名のみなのしのぎやすさよ」の続きを読む